

23歳 郊外の村で芸術家らと出会う
 29歳 同僚と共同で設計事務所を設立
 41歳 仕事のかたわら雑誌を創刊
 53歳 国を離れる

vol. 9

ブルーノ・タウト

▶▶ Bruno Taut

建築を軸にキャリアを広げ、 世界を広げる

日本では、桂離宮や伊勢神宮の中に宿る美を見出し世界へ紹介した評論家としても知られるブルーノ・タウトだが、本業は建築家である。ユネスコ世界文化遺産として登録されている6つの「ベルリンのモダニズム集合住宅群」のうち4つが彼の手によるものと聞けば、建築家の前に「世界的な」と付けたくるのではないだろうか。

▶▶▶ 実務と学問の両輪でキャリアを築く

タウトは1880年、現在のドイツにあたる国で生まれた。父親は商売をしていたがうまくいかず、タウトは学費を自分で稼がねばならなかった。高校を卒業すると地元の建設会社に入社、2年間働きながら大学入学資格を取得し、20歳で国立建築工学校に入学する。

22歳で卒業後は地元を離れ、建築事務所を渡り歩きながら設計の技術を身につけ、大学教授に弟子入りしたりしながら建築理論や都市計画などを学んでいった。

ベルリンで働いていた23歳の時、郊外の村で芸術家を志す仲間たちと過ごす機会を得た。この時の経験は、その後の人生に大きな影響を与えている。後の結婚相手や来日につながる日本人と出会ったのも、この村だった。

29歳になると、職場の同僚と共同でベルリンに設計事務所を設立した。2つの博覧会に出した建築作品はいずれも高く評価され、タウトの名は広く知られるようになった。第一次世界大戦中は工場で軍務をこなし、30代後半になるとトルコやロシアなどにも活躍の場を広げた。

41歳からの3年間は、ドイツ・マクテブルク市の建築課



1880年、ドイツ生まれの建築家。1933年(昭和3年)に来日した際は群馬県高崎市にある少林山達磨寺に2年あまり滞在。『日本美の再発見』『日本文化私観』などを著している。

に勤務した。同じ頃、仲間と建築雑誌を創刊するかたわら本も執筆し、都市計画や建築論、色彩論に関する情報発信を行っている。建築の工学面が強調されていた時代にあって、芸術面を主張したタウトの雑誌や本の読者は欧州に留まらなかった。その後、ベルリンに戻ったタウトは住宅供給公社の主任建築家を任され、住宅団地の建設に力を注ぐ。それは、第一次世界大戦での敗戦により過酷な生活環境に置かれていた労働者の健康を考慮し、樹木が配されるなど自然との調和が図られた住宅だった。

▶▶▶ ナチスから逃れ日本、そしてトルコへ

50歳の時にはベルリンにある工科大学の客員教授に就任したものの、ナチスの政権下で目をつけられ、その職を失う。社会主義者というレッテルを貼られたのだ。不穏な足音が高まる中、日本インターナショナル建築会からの招待状を手にも日本へ向かう。日本では友人らの案内で各地を訪れ、日本の建築や文化に関して本を執筆し、工芸品へのデザイン指導も行った。

来日から3年を過ぎた頃、ドイツ時代の同僚からトルコの大学で教鞭を執らないかと誘いを受ける。建築家としての仕事を求めていたタウトにとって、近代化に向け建築ラッシュが続くトルコへ行かない手はなかった。トルコで大統領から信用を得たタウトは文部省建築局首席建築家も任され、多忙な日々を送る。だが、無理がたたったのか、次第に健康状態が優れない日々が増えていく。その後、心臓疾患により他界。異国の地で58年の生涯を閉じた。

(執筆/ライター 篠田りょうこ)